

ほっといて下さい⑥

～従魔とチートライフ楽しみたい!～

◆ ————— ◆
三園七詩

Nanashi Misono



アラン

王都の部隊の隊長。
デムロスの息子で
ベイカーの兄弟子。

グリップ

王都の部隊兵。
魔法が得意だが、
秘密があるようで……？

コジロー

短剣使いの忍者。
無口だが
愛情深い。

ベイカー

誠実で頼りがいのある
A級冒険者。
ミツキの保護者で、
彼女には常にデレている。

シルバ

魔獣フェンリル。
ミツキの従魔で
高度な魔法を自在に操る。
ミツキが何よりも大事。

シンク

鳳凰の雛。
ミツキに命を救われ、
従魔の契約を結ぶ。

コハク

魔獣ケイパーフォックス。
田んぼでミツキと出会い、
従魔の契約を結ぶ。

ミツキ

事故で命を落とし、幼女として
転生してしまった。
異世界ではトラブルに
巻き込まれがち。
周囲が過保護すぎるのが悩み。

CHARACTERS

登場人物紹介

目次

ほつとんて下さん 6

〜従魔とチートライフ楽しみたい！〜

書き下ろし番外編

デート

ほつとらて下さい 6

〜従魔とチートライフ楽しみたい!〜

プロローグ

私、ミヅキは前世で事故に遭い命を落とし、気がついたら幼女の姿に転生してこの世界にいた。

最初はあまりに予想外な展開に驚いたものの、頼りになる可愛い従魔達——フェンリルのシルバや、鳳凰の子供のシンク。

新たに従魔となってくれた、ドラゴンのプルシアやケイパーフォックスのコハク。

身寄りのない私の親代わりになってくれた、世話焼きのベイカーさんやコジローさん。馴染みになったお店『ドラゴン亭』のリリアンさん達や、お米作りを手伝ってくれる子供達に囲まれて賑やかに過ごしていた。

しかし、ゆっくり過ぎたという私の気持ちとは裏腹に、誘拐されたり王子に気に入られたりと、私の周りではトラブルだらけ。

その代わりに沢山の素敵な人達との出会いもあった。

ドラゴン亭の手伝いで向かった王都では、王宮に勤める部隊兵達と仲良くなった。

王都の第五部隊の隊長のアランさんはベイカーさんの兄弟子で、町のギルマスであり、私のことを溺愛してくれるデймロスじいちゃんの息子だったのだ。

アランさんは私の作るご飯が気に入ったのか、よく私達がお米を作っている土地を訪れていた。

「おい、ミヅキ」

「あっアラン隊長」

「今日も朝からアラン隊長が一人で私達のところに遊びに来た。」

「今日もシルバと手合わせに来たの？」

「いや、今日はシルバ達に招待状を渡しに来た」

「招待状？」

仕事をしている手を止めてアラン隊長の側に寄る。デポットさんとレアルさんもいつの間にか隣に来ていた。

二人は最近私の元に来てくれた従者である。

デポットさんは、かつて私を誘拐した元誘拐犯で、奴隷になったところを私が買い取ったのだ。レアルさんは、王宮に勤めていた時に私に大迷惑をかけ、クビになったと

ころをそのまま雇わせてもらった。

「アラン隊長、あまりミヅキに変なことをさせないで下さい」

「そうだ、ミヅキはただでさえ色々やらかすから、目が離せない」

二人はジロリとアラン隊長を睨みつける。

「まあまあ、今回は大丈夫だろ。だって誘うのはミヅキ本人じゃなくて、従魔達とベイカーだからな」

「あつ、それならどうぞ」

二人は揃って笑顔になる。

「それでお誘いつて何？」

私は話になってアラン隊長に問いかける。

「今度、全部隊で合同練習をする予定があるんだ。それにお前達も参加しないか？」

「何それ！ 面白そう」

合同練習だなんて、話を聞くだけでワクワクしてしまう。

シルバ達を見ると、参加したいと尻尾を振っている。

【ミヅキ！】

【ふふ、わかってるよ】

私はアラン隊長のお誘いを快く受けることにした。

「あつでも、ベイカーさんに聞いてみないと」

「それは大丈夫だ。あいつに拒否権はない。それに他にも来たい奴がいたら連れてきていいぞ」

アラン隊長は詳しい日時は追って知らせると言って、その日は早々に立ち去った。

「合同練習か……なんか楽しそう！」

王都での楽しいイベントの予感に私は胸躍らせるのだった。

一 合同練習

「ふわあ〜」

合同練習当日。

私は欠伸をしながら部屋を出た。丁度ベイカーさんも部屋を出てきたところだった。

「ベイカーさんおはよう〜」

「おう！ ミヅキおはよう、ちゃんと起きられたんだな」

この世界には目覚まし時計がない。

だから、私はなかなか時間通りに起きられず、たまに寝坊することがあった。しかし、私には目覚ましよりも頼りになる存在がいる。

「シルバが起こしてくれたい」

そう言っつて、誇らしげなシルバの頭を撫でた。

「ははは！ さすがシルバだな。さあ準備して行こうぜ、きつとコジローが外で待ってるぞ」

「そうだね。合同練習楽しみだなあ。ベイカーさん頑張つてね！」

「任せておけ！ 王都の兵士達なんかになんか負けねえからな！」

やるからには全力でやる！

最初は合同練習への参加を渋っていたベイカーさんだが、かつこいいところを見たいと言っつたらコロッと態度を変えて今は気合いを入れていた。

部屋を出て下に下りるとデボットさんが用意を終えて私達を待っていた。

「デボットさん、おはよう」

「ああ、おはよう」

皆で外に出るとやっぱりコジローさんが待っていた。

「コジローさん、おはよう」

駆け寄つて抱きつくと、コジローさんは優しく微笑み受け止めてくれる。

「ミヅキ、おはよう。ベイカーさんもシルバさんもデボットもおはようございます」

「おはよう、じゃ早速行こうぜ」

合同練習には、デボットさんとコジローさんも含めた皆で行くことになったのだ。

皆が集まり、並んで話しながら招待された王宮の練習場に向かう。

練習場に着くともう、部隊兵の皆が揃っていた。

隊長達が集まって話をしているところに私は駆け寄ると「皆さんおはようございます！ 今日合同練習のお誘いありがとうございます」と元氣よく挨拶する。

「ミヅキおはよう、今日はお手柔らかに頼みますよ」

カイト隊長が爽やかに挨拶を返してくれる。

うん、今日も練習を着こなして安定のイケメン！

「ミヅキ、久しぶりだな」

カイト隊長の隣にいた副隊長のエドさんが話しかけてきた。

「エドさん久しぶり」

「相変わらず色々噂がきてるぞ」

エドさんはそう言っつて、ニヤニヤと含み笑いをする。
 なんだ噂って……？

「ミツキさんおはようございます」

心当たりがありすぎて悩んでいると、いつの間にかガッツ隊長が側に来ており、長身の体を屈ませながら笑いかけてきた。

「ガッツ隊長、おはようございます。体調は平気？」

「ええ、問題ないです！」

ガッツ隊長は逞しい腕で力こぶを作る。そんな様子をジーンッと観察するように見つめていると、ちよつと小柄な兵士さんが慌てた様子で駆け寄ってきた。

「ほら！ 隊長が怖い顔をしたからミツキさんが固まってますよ！」

小柄な兵士さんは私が筋肉に見とれているのを、ガッツ隊長の顔が怖くて怯えていると勘違いしたみたいだ。ちゃんと誤解を解かないと！

「隊長の顔かっこいいよ。それにその筋肉……ちよつと触っていい？」

「「えっ？」」

小柄な兵士さんも他の人達も私の発言に驚き声をあげた。

ガッツ隊長はもちろんと言っつて屈んだ後、腕を差し出した。私は遠慮なく筋肉をぺた

ぺたと触らせてもらった。

「凄い！ ガッツ隊長、筋肉モリモリだね。かっこいい」

引き締まった筋肉にこれまでどれほど努力してきたのかを思い、尊敬のまなざしでガッツ隊長を見上げる。

「まじで喜んでる……」

「あのガッツ隊長の顔、とろけてていつもより怖い」

ガッツ隊長は私に筋肉を褒められて嬉しそうだったけれど、隊の皆がざわついてしまった。

「ガッツ隊長よかったっすね、筋肉を褒められて」

そんな中、先程の小柄な兵士が嬉しそうにガッツ隊長に声をかけた。

ガッツ隊長と仲の良さそうな様子を見て、私は初めましてと兵士さんに挨拶した。

「僕は第二部隊副隊長のバックです。よろしくミツキさん」

「副隊長なんですか？」

小柄であんまり強そうに見えないので驚いてしまった。笑顔がちよつとデボットさんに似てて、色々と考えていそうな人という印象だった。

「よろしくお願ひします。バック副隊長」

「よう！ ミツキ〜」

パックさんに挨拶していると、今度はアラン隊長がダルそうに歩いてきた。

「げっ！」

後ろからベイカーさんの声が漏れる。

「おっ！ ベイカー、逃げずに来たな」

アラン隊長がベイカーさんに気がついてニヤニヤと笑っている。

「ふふふ……」

二人の様子に思わず笑ってしまった。

「何笑ってるんだ？」

ベイカーさんが自分のことを笑われたと思ったのかジロツと睨んでくる。

「だって、ベイカーさんとアラン隊長、笑い方そっくり……ぶっ！」

堪えきれずにあははと思いきり笑った。

「似てねえし！」

ベイカーさんとアラン隊長が納得がいけないといった表情をしている。

やっぱりそっくり！

「ほら隊長、人をからかうのはそのくらいにして下さい！」



セシルさんがアラン隊長を止めると「そろそろ、私達も挨拶させてくれる〜？」と綺麗なお姉さんが声をかけてきた。

「げっ、ミシエル」

アラン隊長が顔を顰めて、綺麗なお姉さんに場所を譲った。

「初めましてミヅキちゃん。私は第三部隊隊長のミシエルよ、よろしくね〜」

差し出された手を見てしつかりと握手を交わす。

あれ……？

「よろしくお願ひします。ミシエル隊長、とっても綺麗だね！ 男の人とは思えない！」

私の言葉に周りが固まった。

「この子……」

褒められたのに喜ぶこともなく、ミシエル隊長まで動きを止めてしまった。

「ミヅキ、ミシエルが男だってわかるのか？」

アラン隊長に確認されたので、コクリと頷いた。

「えっ？ うん、握手した時にわかったよ？ でも男の人なのに綺麗でかっこいい

ねえ〜。服もアレレンジしてあって、それでいて似合ってる素敵！」

改めて本当のことを言うと言いつつミシエル隊長は表情を崩して笑った。

「ふふふ、ありがとう。ミヅキちゃんも可愛いわね。食べちゃいたいくらい」

「えー！」

お世辞でも嬉しい！ 思わず二人で顔を見合わせて笑い合ってしまう。

「アランさん、本当にあの男男なのかよ！」

ベイカーさんがコソッと確認するように話しかける。

「ああ、れつきとした男だ。あんなにすぐに見破った奴初めて見るけどな」

「まあミヅキだから」

ベイカーさんが呆れ気味に言っている。聞こえてますよ！

「それにしてもミヅキは、男が女の格好をしていることになんの疑問も持ってねえな？
なんでだ？」

アラン隊長が首を捻っている。確かにこの世界には、ミシエルさんみたいな人は少ないみたいだもんね。私は、好きなものを身につけて、似合っていればなんでもいいと思
うけど。

「ほら、次がつかえてんだよ！ お前は退いてろ！」

後ろから乱暴な声がかかると、ミシエル隊長がスッと退いた。その動きがあまりにも優雅で見とれてしまった。

カイト隊長も同意すると他の人もそうだと頷いていた。
「うるせえ！」

タナカ隊長は皆に責められて、気まずそうに悪態をつきながら自分の部隊を引き連れてどこかに行ってしまった。

「ミヅキ、不快な思いをさせてすまないな」

「あいつはまだ隊長になって浅くてね……自分の立場がわかっていないんだ」
カイト隊長もガッツ隊長も申し訳なさそうに謝ってくれる。

「別に平気だよ、それにタナカ隊長が怒った理由も少しわかるし」

「わかるのかよ！」

私とタナカ隊長のやり取りを見守っていたベイカーさんが、驚いたような顔をしている。
「だって、こんな立派な隊長達に囲まれてるんだもん。きつと、自分も隊長らしくなら

なきゃって焦ってるんだよ。もう少し余裕が出てくるといいねえ」

「お前はどこのご隠居だ！ 発言が幼児じゃねえんだよ！」

ベイカーさんが思わずといった様子でツッコミを入れる。

失礼な、ちととられつきとした幼児だわ！ 見た目だけは！

心の中ではベイカーさんにプンプンしながら怒っていた。



「あれが、皆がご執心しやくしんのミヅキちゃんねえ」

ミヅキがベイカーに怒っている横で、ミシエルがアランに声をかけていた。

「どうでしたか？」

カイトがうかがうようにミシエルの顔を覗く。

「確かに只者ただものじゃないわねえ……」

ミシエルの様子をうかがうに、なかなかの好感触だったようだ。

「ミヅキさんの魅力はこんなもんじゃないですよ」

ガッツも真剣な顔で力説している。

「ガッツ隊長のあんな顔、初めてみましたよー」

バックは何かを思い出したのか笑っていた。

「ね、ガッツ隊長って笑うのね。私もミヅキちゃんともっとおしゃべりしてみたいわあ」

「げっ！ ミヅキがミシエルに目をつけられた」
 アランは大袈裟に顔を顰めた。

「何よ、皆だつて手を出したんだから私にだつてその権利はあるでしょ！」

ミシエルは「ミヅキちゃん」とベイカーと言いつ合っているミヅキの元に駆け寄っていく。

「あれはかなり気に入ってるな……」

アランがボソツと言うと、それを見ていた隊長達が同意するように頷いた。



「よし、じゃ各部隊整列！」

セシルさんが声をかけると副隊長を先頭に皆が綺麗に列を整える。

一糸乱れぬ様子が軍隊みたいでカッコいい！

部隊長達が前に立ち、私達は部隊が整列している横に並んだ。

「皆も知っていると思うが、本日の合同練習にはミヅキさんの従魔達とベイカーさん、コジローさん、デボットさんも参加している。いつもとは違う練習メニューも考えてあ

るので、最後まで気を引き締めて行うように！」

アラン隊長が一番後ろまで聞こえるような大声で、今日の合同練習について説明する。いつもとは違う真面目な様子に感心してしまった。

「では、まず軽く練習場を走るぞ！」

アラン隊長の言葉を聞いて、私とデボットさんはそつと端に避けていく。

「なんだ、ミヅキは参加しないのか？」

その様子を見て、エドさんが声をかけてきた。

「私が参加したら足でまといだからね、シルバ達がその分頑張るからよろしくね」

【僕も走るのはいいや〜】

シンクがシルバの体から私の肩に移動した。

【シルバ、コハク頑張ってね！】

シルバとコハクは尻尾を振るとベイカーさん達と共に列に並んだ。

「じゃ、手始めに十周な〜」

アラン隊長が軽く言つて走り出すと、皆が続いて走っていく。

「なんか、ペースが速くない？」

私は隣のデボットさんにそつと耳打ちする。

「あれが部隊兵達の軽くなのか？」

デポットさんも呆れるその速さは、全力ダッシュしているくらいの速さだった。

「しかも十周って、ここ一周何メートルあるの？」

広いグラウンドを見るに、一周とはいってもかなりの長さがありそうだ。

しかし、皆はあつという間に一周を走り終わり、私達の目の前を悠々と通り抜けていく。

「皆ー、頑張れー！」

声をかけると手を振り返してくれる人がほとんどで、まだまだ余裕がありそうだった。

「凄いね、一応走り終わった時の為に飲み物を用意しておこうかな」

グラウンドの端に良さそうなスペースを見つけたので、魔法で屋根付きのテーブルを造る。

「お、おい、勝手にこんなのを造っていいのか？」

「帰りに壊していくからいいでしょ」

デポットさんは焦っているけれど、私は気にせずにテーブルに麦茶むぎぢやとレモネードを用意した。走っていたベイカーさんが私の用意した飲み物に気がついたようだ。

「ミヅキー、あの黄色い飲み物を持ってきたのか！」

走りながらベイカーさんが声をかけてくる。

「うん、終わったからねー」

あつという間に走りすぎていったベイカーさんに返事を返す。

すると、ベイカーさんは気合いを入れたのか速度をあげると先頭のアラン隊長を抜いた。

「アランさん、先に十周しちゃいますね！」

「何？ 追い越していいのか？」

そんなベイカーさんを見てシルバも反応する。そしてあつという間にベイカーさんを追い越した。

「なっ、シルバ速すぎ！」

ベイカーさんが後を追いかけるが、先頭を走るシルバとの距離はどんどん開いていく。「お前ら、客人に舐められてるぞ！」

独走するシルバとベイカーさんを見てアラン隊長もスピードをあげた。

「なんか……軽く流すって感じじゃないよね？」

「ああ、あの人達、何してんだか」

いつの間にか本気で走ってる面々を、私とデポットさんは呆れて見つめていた。

「ミヅキ、飲み物くれー!」

十週を走り終えたベイカーさんが、汗を拭きながら私のところにレモネードを貰いに来た。ベイカーさんが気にしていた黄色い飲み物は、レモンとはちみつで作ったレモネードだったのだ。

「ちょっとベイカーさん、速すぎない? もっとゆっくり走りなよ!」

文句を言いながらもレモネードを渡すと、ベイカーさんはグイッと飲み干す。

「ぷはあー! やっぱり美味しい!」

「昨日味見で散々飲んだじゃん」

「いや、運動した後はまた格別だ!」

【シルバもコハクもレモネードを飲む?】

【俺はミヅキの水がいい】

シルバの答えにコハクも頷く。二人はいち早く戻ってきたので、先にお水を出してあげていた。

シルバ達にはレモンは酸っぱすぎたかな?

走り終わった面々があちこちではあはあと息を整えていると、隊長達が集まってきた。

「ミヅキー俺にもくれ、おっ! 麦茶がある」

アラン隊長に麦茶を渡すと、これまたあつという間に飲み干す。

「アラン隊長……何その色の水、腐ってません?」

麦茶の色に皆が怪訝な顔をしている。

「ミヅキさんが用意するものに変なものなどないでしょ」

カイト隊長が迷わずに麦茶のコップを掴むと一口飲んだ。

「美味しい」

味にびっくりした後は、残りもごくごく飲んでいく。その様子を見て、他の部隊兵の皆も飲みたそうにゴクッと唾を飲んだ。

「よかつたら皆さんもどうぞ。こっちの茶色いのが麦茶で、こっちがレモネードです。

レモンを搾ってはちみつで甘くしてありますよ」

「そっちも飲もう!」

アラン隊長がレモネードにも手を出した。

「うつま! なんだこれ!」

他の隊長もどれどれとレモネードにも手を伸ばす。

「爽やかで甘くて美味しいわあ〜！」

ミシエル隊長が上品に口に手を当てて驚いている。

「コジローさんも飲んでね〜」

遠慮して後ろにいたコジローさんに笑顔でレモネードを渡す。

「これからまだ練習あるから飲みすぎないようにねー、特にアラン隊長」

ジロツと見ると、アラン隊長が三杯目のコップに手を伸ばそうとしていた。

「まだまだ用意してあるから、また後でね」

注意されたアラン隊長は、渋々手を戻した。

「さあお前から次だ、次！ 今度は……新しい訓練の鬼ごっこだ！」

「『鬼ごっこ？』」

部隊兵達が練習メニューを聞いて戸惑っている。

「今更、子供の遊びっすか？」

「鬼ごっこなんて軽いよな」

部隊兵達が楽勝、楽勝と笑っている。

「ちなみに鬼はこちらのミツキの従魔のシルバとコハク、ベイカーとコジローさんが

やる」

『へっ？』

先程まで笑っていた部隊兵達が表情を変えた。

「彼らに鬼ごっこの陣地の線の外に投げ出されたら終わりだ。最後まで残ってた五名に、

ミツキから特別なご褒美があるそうだぞ！」

「ちよつと、隊長！ フェンリルが鬼なんですか？」

「ああ、でも鬼ごっこなんて楽勝なんだろう？」

アラン隊長がニヤツと笑いながら練習場に大きく長方形の線を書く。

「この線の中にさっさと入れ！ 出されたら速やかに端に端に避けろよ」

皆がゾロゾロと線の中に入ると、鬼になったシルバ達から距離を取る。

「思ったより広いな、これなら逃げ切れるか？」

部隊兵達が少し安堵しているところにアラン隊長が声をかけた。

「ちなみに隊長達は見学と審判だ！ じゃいくぞ！ よーい……ははじめ！」

アラン隊長の合図にシルバ達が一斉に線の中に入る。

「やばい！」

シルバはあつという間に部隊兵達の後ろに回り込み、足を取ると前足でポイントと横に

払った。兵士さんは凄い勢いで線の外に投げ出された。

「グッハ！」

【あれ？ コレでも力が強すぎたか】

脇腹を痛そうに押さえている兵士にアラン隊長が近づく。そして、ちよんちよんと脇をつついて確認する。

「骨は折れてはいないようだな、なら問題なし」

その言葉に部隊兵達は冷や汗が流れた。私は慌ててシルバに声をかけた。

【シルバ、もうちょっと力加減してあげて！】

【わかった！ わかった！】

シルバは頷くと次の兵士に狙いを定めて駆け出した。

トントントン。

一瞬で兵士達を続けざまに外に出していく。

「全然動きが見えねえ！」

シルバの周りだけでなく、違うところでも声があがる。

「この人、動きがアラン隊長そっくりだ！」

兵士達が、ベイカーさんに首根っこを掴まれてポイッポイッと外に投げ出されている。

「やばい、後ろを取られるな！」

「前も後ろも逃げ場がねえよ！」

「うわあ、今度はなんだ！」

今度はコジローさんに足を引っ掛けられて、服を掴まれポイと外に投げ出される兵士が見えた。

「足音が全然しないぞ、気をつけろ！」

「それならあの狐だ！ それなら俺達でも……！」

一見大人しそうに見えるコハクを眺め、安全そうだと逃げ惑う兵士達が集まってきた。「待て！ すばしっこいしあの速さで体当たりしてくるぞ！」

パニックになる兵士達。どうやら彼らはどこに逃げても外に出る運命だったようだ。

「おいおい、ちゃんと頭使って逃げろよー」

アラン隊長が情けないと外から檄を飛ばす。

シルバ達の活躍で、線の中にいた部隊兵達の人数はあっという間に半数以下になる。

そうするとスペースが出来て、逃げるのも少し楽になっているようだ。

「副隊長達は皆残ってますね」

カイト隊長が感心しながら様子をうかがっている。

「まあ、早々に捕まったらメンツが立たないからな」

「でも……私でもアレには掴まっちゃうわ」

ミシエル隊長がシルバを見ている。隊長達も頷いているから、やっぱりシルバは凄みたいだ。

「あれでも全然実力を出していないから恐ろしい」

ガッツ隊長はシルバと戦ったことがあるだけにしみじみと頷いている。

「怖いわねえ」

「あつ、そろそろ二十名くらいになったな！」

アラン隊長が残っている人数を数えだす。線の中には各部隊の副隊長と部隊兵が数十人残っていた。

「ここからが本番だな！」

隊長達がニヤツと笑った。

シルバは一人の兵士に狙いをつけると「シュン！」と一瞬で間合いを取る。すると兵士がそれに反応して横に飛び退いた。

【コハク、今だ！】

狙い通りに横に飛んできた兵士にコハクがポンツと体当たりすると、バランスを崩し

て兵士が外に出てしまった。

「何やってんだ、オリバー！」

タナカ隊長がやられた兵士を叱咤する。

「いや、無理だろ、避けただけでも褒めてほしいわ！」

オリバーさんが体の土を払うと待機場所に戻ってきた。

「無理じゃねえ！」

タナカ隊長は自分の部隊兵が皆やられてしまいいライラしているみたいだ。

「じゃ、タナカ隊長も相手してみて下さいよ！」

オリバーさんがご機嫌ななめのタナカ隊長を軽くあしらう。

「それいいな、タナカお前も参加してこい」

アラン隊長がいい考えだと手を叩く。

「ああ、やってやろうじゃなか！」

アラン隊長がシルバ達に声をかけると、タナカ隊長は線の中に入っていった。

【あいつ、さつきミツキに舐めた口を利いた奴だな】

シルバがタナカ隊長を見ると周りの空気がピリツとした。それに気がついてベイカーさんがシルバに声をかける。

「おいシルバ、気持ちのはわかるが本気は出すなよ」
シルバがわかってるとばかりにふんと鼻息を出すと、先にコハクが動いた。先程までとは比べ物にならない速さでタナカ隊長に向かって突進するが、サツと避けられる。

「やるなあ」

【ほお……】

ベイカーさんもシルバもタナカ隊長の動きに少し警戒をする。

「生意気な奴だが、さすがに隊長になるだけのことはあるな」

ベイカーさんが声をかけると「ふん、当たり前だ！」とタナカ隊長が馬鹿にするなど睨みつけた。

【じゃあ俺が行こう】

シルバがザツと前に出るとタナカ隊長がジリッと警戒して後ずさりした。タナカ隊長はシルバの行動を見逃すものかと食い入るように見つめていたが……なんの前触れもなく目の前にいたシルバは一瞬で姿を消した。

「なっ！」

タナカ隊長は声を出そうとしていたが、同時に右脇にシルバが突進する。その瞬間にタナカ隊長は意識を手放してしまった。私はやりすぎたシルバの前に立ってお説教を

する。

【シルバ！ やりすぎないでって言ったでしょ！】

【で、でもあいつ、ミヅキのことを睨んでいたから……】

シルバのシユンとした姿を見てため息をつく。

「おっ、目が覚めたか？」

アラン隊長の声に、シルバへのお説教を止めてタナカ隊長の様子を見に行くことにした。

「俺、やられたのか……？」

「ああ、瞬殺だったな！」

アラン隊長が容赦なく笑う。

「くっそっ！」

悔しそうにしているタナカ隊長の側に行き声をかけた。

「タナカ隊長、大丈夫？」

タナカ隊長は「ああ」とぶっきらぼうに答えてくる。

「隊長、いい加減にしろ！」

ゴン！ とオリバーさんがタナカ隊長の頭に拳骨けんこつを食らわせた。

「な、何すんだ！」

タナカ隊長が頭を押さえながらオリバーさんを睨んだ。

「ミヅキちゃんに嫉妬するのもいい加減にしろ！」

嫉妬？ どういうことだろう。

「ち、違う！」

皆が見つめるとタナカ隊長が慌てて首を振る。

「他の隊長達がミヅキちゃんのことを構うもんだから、嫉妬してるんですよ！」

あっ……なるほどね。

「なかなか他の隊長達みたいに立ち回れないから焦つてるところに、隊長達が凄く凄いと褒めるもんだから」

「そうだったのか、タナカ。それは悪かったな」

オリバーさんの言葉を受けて、ガッツ隊長がタナカ隊長の頭を子供をあやすように撫でた。タナカ隊長はその手を振り払うと、顔を赤くして怒っている。

「違う、そんなじゃねえよ触るな！」

なんか、いじけてる子供みたい。私は思わず「ぷっ」と笑った。

「このガキいー！」

私に手を出そうとしたタナカ隊長は、またオリバーさんに頭を叩かれた。

「お前！ 仮にも俺は上司だぞ！」

「今のは幼なじみとしてだ！ お前怪我した脇腹はどうなんだ？」

そう言われてタナカ隊長は右脇を触るが、痛みも何もないことを不思議そうにしている。

「確かに気を失う前に激痛が襲ったはずだ」

そう言っって首を捻っている。

「ミヅキちゃんが手当てしてくれたんだぞ。何か言うことはないのか！」

「お前が治してくれたのか？」

「だって、うちのシルバが力入れすぎちゃったみたいで……逆にごめんなさい」

私が頭を下げると周りの隊長がジトツとした視線をタナカ隊長に送っている。

「あついや、あれは練習での事故だ。気にすんな」

そうは言っても怪我をさせてしまい申し訳なく思っていると……

「ああもう！ 大丈夫だ、治してくれて感謝してる」と、躍りになったのか大声で答えた。

「タナカ隊長、これよかったら」

私がレモネードを差し出すとタナカ隊長は受け取ってくれた。そして、投げやりになったのかゴクゴクと勢いよく飲みだした。

「なんだこれ、すっげえ美味い！」

「だろ？」

何故かアラン隊長がドヤ顔をする。

「それになんだか力が戻ってくるような気がする」

ギクッ！ 私の作った食べ物の秘密に気がつかれたかと表情が固まるが、タナカ隊長はそれ以上何も言わずにレモネードを飲み切った。

「ご馳走様、美味かったよ」

「どういたしまして」

私はニッコリと笑顔を返した。

「さあタナカ隊長も大丈夫そうだから練習を続けるぞー」

アラン隊長が声をかけると、先程の残ったメンバーで鬼ごっこを再開した。



「はい、そこまで！ 残ってるのは副隊長の四人とシオンだな」

「やった……！」

シオンさんが肩で息をしながらガッツポーズをする。

「じゃあご褒美はミツキからだ！」

そう言われて私は五人の元に向かった。

「おめでとうございます。コレ、今私達が造ってるリバーシです」

「えっ、リバーシ！ 今全然手に入らないやつですよー！」

周りの部隊兵達もリバーシを見たいのか、五人の元に詰め寄ってくる。皆の思った以上の反応に、そんなに人気なんだと驚いてしまう。

五人にリバーシを渡していくと負けた兵士達が羨ましそうに見つめていた。

「いいなあ」

「シオン、後でやらせてくれよ！」

「次もなんかご褒美があるのかな？」

他の部隊兵達をご褒美にソワソワしだした。

「ほら、次の訓練いくぞー！」

「はい！」

部隊兵の返事がいつもより大きいことにさすがのアラン隊長も呆れていた。その後は素振りをするようになったのだけど、各部隊いつもより気合いの入った素振りをしていったみたいだ。

「九百九十八、九百九十九、千！ 終了」

アラン隊長の掛け声と共に皆が剣を置く。

「や、やばい……腕が」

「マジでやりすぎた」

部隊兵達がドカッと地面に座り込む。

「ほら、休んでる暇はないぞ！ 次はドッジボールだ！」

『ドッジボール？』

部隊兵達は聞いたことのない訓練方法に顔を見合わせた。

「では、ドッジボールのルールの説明をします」

この競技を提案した私が皆の前に出て説明する。

「皆さんには、前もって十二人のチームに分かれてもらってますよね。ドッジボールは、チーム対抗ボール当てゲームです」

「ボール当て？」

「はい、正式なルールは私もよくわからないからオリジナルルールね。まずは、あちらのコートをご覧ください」

そうやって皆が素振りをしている間に引いたコート線の線を見せる。

「長方形の真ん中に線が引いてあると思うんだけど、その線を境に二つのチームが長方形の中に入ります！ それで、線の中から出ないように気をつけながらボールを相手チームに当てます。当てられた人は外野がいやといってこの長方形の枠の外に出ます」

線の中を走りながら身振り手振りで説明する。

「コートの中の相手を全員当てたチームが勝利。細かいルールは隊長達が実践しながら説明していきます。隊長、副隊長、お願いします」

前もってルールを詳しく教えておいた隊長達がコートに立った。

「まずは、ボール権かコート権を決めます。代表者がじゃんけんをして下さい」

アラン隊長とセシルさんがじゃんけんをするとアラン隊長が勝った。

「じゃ、俺達がボールな」

「コートはこっちでいいです」

二人はサツと決めた。

「そしたらチーム内で外野がいやを決めます。外野がいやは内野ないやが少なくなったら復活することが出

来るので、その際は大声で復活！と皆がわかるように叫んで下さい」
隊長達が内野と外野に分かれるとアラン隊長がボールを持つ。

「じゃ、軽くやって下さいね、アラン隊長お願いします！」

アラン隊長が軽く？ 凄いやつて下さいね、アラン隊長お願いします！」

「体のどこかにボールが当たればアウトです。当たった人は外野に行ってください」
セシルさんが外野へと走った。

「ちなみに、一度地面についたボールに当たったり、顔に当たった場合はセーフとなります。あとはボールをキャッチ出来ればもちろんセーフです！」

今度はアラン隊長がワンバウンドでボールを投げてベイカーさんに当てる。

「これはセーフです」

ベイカーさんがボールを投げてガッツ隊長の肩に当てる。

「これはアウト！そして……」

外に出たガッツ隊長がお返しとばかりにベイカーさんに当てた。

「外野に出ても、敵チームの誰かを当てる事が出来れば内野に復活出来ます」

ガッツ隊長が内野に戻る。その後も軽い投げ合いをしながらその都度説明を加えて、あつという間にアラン隊長が一人となった。



「復活！」

するとカイト隊長が声を出し内野に戻った。

「内野がゼロになったら負けなので、外野は見極めて内野に戻って下さいね。今は簡易で説明したので本番は外野が二人、内野が十人で始めて下さい」

私の説明に皆がポカーンとしてしまった。あれ？

「皆わかった？ それとも……」

説明が悪かったかと顔を曇らせる。

「あついや、わかったんだけど……凄いな、これミヅキちゃんが考えたのか？」

「あつ……えつとどこかで聞いた遊びです」

私が答えに戸惑っているとアラン隊長が声をあげてくれた。

「はい、はい、はい。説明は終わりだ、お前らわかっただろ、準備しろー」

一度コートに分かれて軽く練習をすることになった。

「五コート作つてあるので各部隊に分かれて練習してみして下さい。隊長と副隊長は審判とルール説明をお願いしますー」

私は全体が見渡せる高い台に上がって周りを見る。

部隊長達が投げ合つてボールの感触を確認していた。

さすがに皆ボールの速度が違う、当たったら痛そうだ。

しかも初めてだるうに、皆上手にボールを受け止めている。元の身体能力が違うのかな。

「大丈夫そうかな」

練習の様子を見てアラン隊長に合図を送ると、アラン隊長が一度皆を集めた。

「よし、じゃクジを引いて対戦相手を決めるぞ。代表者前に！」

私が作つておいたクジを各チームの代表が引いていく。

「紙に書いてある数字が同じ相手と戦います。《一》が書いてあるチームは一番のコートに行つて下さい」

各自クジの数字のコートに分かれた。

「じゃ、これより第一回ドッジボール大会を始めます！」

私の声を合図に隊長達がボールを各チームに渡していった。



「さすがに皆動きがいいね」

試合を見ながら、隣にいるベイカーさんとデポットさんにのんびりと話しかける。

「あっ！そこじゃねえよ、くそー、俺も出来たらなー」

ベイカーさんは加わりたいのか、試合を見てうずうずしている。

「なかなか当たらないね。皆取るのが上手いなー」

「あんな速いボールをよく取れるよな」

デポットさんがあれに当たったらと想像してブルツと震える。

「あっ、第四部隊のBチームが勝ったみたい。第一部隊のAチームは負けちゃったね」

紙に作ったトーナメント表のBチームを太い線でなぞる。

「あつミツキ、二番コートも終わったぞ。第三部隊のBチームの勝利だ！」

「はーい」

カキカキ！

「三番コートは第一部隊のBチームが勝ったぞ」

コジローさんが教えに来てくれた。

「四と五番コートも決まったな。第二部隊のAチームと第五部隊のBチームだ」

「凄いな、各部隊一チームは残ってるね！」

「ちょっと休憩したらまたクジを引こうね、ここから隊長チームが入るよ！」

『えー！』

勝利チームからブーイングが出る。

「勝てっこねえよ！」

「無理だよ、あの人達、人間じゃねえし！」

「そーだ！野獣だ！」

「バケモンだ！」

ここぞとばかりに悪口が飛び交う。

「てめえら、言いたい放題言いやがって覚えてるよ！」

アラン隊長が「文句を言った奴前に出ろ！」と大人げなく騒いでいる。

「大丈夫ですよ、隊長達は五人で一チームにするから。しかも、皆のチームには各部隊

の副隊長に加えて、ベイカーさんとコジローさんが入ります！」

「えっ？あと三チームは？」

計算が合わないと不安そうにしていた。

「助っ人が来てくれます！レオンハルト王子とユリウスさんにシリウスさんで

す！」

『えっええー！』

私の紹介の後王子達が皆の前に現れた。

「皆練習ご苦労！ 今回は途中からだだが、俺達も参加させてほしい！」

王子がチラチラと私の方を見ながら皆に声をかける。

「なんで王子がいるんだ？」

ベイカーさんがコソツと話しかけてきた。

「ユリウスさんとシリウスさんを誘ったらついてきた……」

諦めて真顔で答える。本当ならユリウスさんとシリウスさんだけでよかったのだが、レオンハルト王子は二人を貸すなら自分も行くと言って聞かなかったのだ。

レオンハルト王子は挨拶もそこそこに私の側にやってきた。

「ミヅキ、久しぶりだな！ あの弁当は凄く美味しかった。ありがとう」

キラキラの笑顔でお礼を言ってくるが、一瞬なんのことかわからなかった。

「お弁当？ あっ、お弁当ね！ 確かユリウスさんとシリウスさんにもあげたやつだね」

私が白々しく答える。

あれはシリウスさん達に作ったものだ。

そんな私の思いに気がつかず、レオンハルト王子は瞳をキラキラさせて熱弁してくる。

「あの玉子焼きはすっごく美味しかった！」

「あー、あれね。コハクをイメージした狐の玉子焼きですね！」

「えっ狐？」

「そう、狐のコハク！ こう、耳があつたでしょ？」

私はコハクを呼ぶと抱き上げて王子によく見せる。

「見て下さい、可愛いでしょ。この大きな耳をイメージしたんだよ！」

「狐……あれはハートでなくて狐……」

王子がブツブツと呟いている。ユリウスさん達をチラッと見ると苦笑していた。

「シリウスさん、ユリウスさん、今日は来てくれてありがとうございます。ドッジボールのルールはわかる？」

「ああ、予め聞いておいたから大丈夫だ」

シリウスさんの答えに同意するようにユリウスさんも頷く。

「レオンハルト王子は平気？」

「あ、ああ、大丈夫だ……」

全然大丈夫じゃなさそうにしよんぼりと答える。

まだハート形の玉子焼きのショックから立ち直っていないようだった。